

弓削商船高等専門学校  
第8回運営諮問会議報告書

平成23年12月

# 目 次

はじめに .....	1
1 第7回運営諮問会議の提言 .....	2
2 提言に対する学校の対応 .....	2
3 第8回運営諮問会議諮問事項 .....	6
4 審議内容 .....	10
5 提 言 .....	12



# はじめに

独立行政法人化した平成16年度、教育研究の質を一層向上させるための外部有識者による評価組織として運営諮問会議を設置いたしました。本年度は12月19日に第8回運営諮問会議を開催しましたので、その内容をまとめたものを公表いたします。

第1回会議では、「本校の特徴を活かした個性的な教育について」「本校に適正な入学生の確保と個性伸長のための教育改善について」、第2回会議では、「本校の社会貢献のあり方」「専攻科の発足と内容の充実に向けて」、第3回会議では、「学生指導について」「学生寮の運営について」、第4回会議では、「地域共同研究推進センターにおける活動成果の教育への還元」「専攻科におけるインターンシップ及び弓削丸の活用」、第5回会議では、「入試業務に関すること」「学内施設の効率的な運営方法」、第6回会議では、「第1期中期計画のまとめについて」「技術支援センターについて」、第7回会議では、「国際交流活動について」を諮問し、委員の方々からは貴重なご提言をいただきました。

今回の第8回会議では、第7回会議でのご提言に対する対応状況を説明した後、「多様化する学生への支援について」の項目について諮問いたしました。

「多様化する学生への支援について」では、初等教育機関から高等教育機関にいたるまでの共通した検討事項であり、各教育機関においても様々な取り組みが行われております。最近では、学生が多様化する中で、進路や人間関係での迷いが生じる学生も多々おり、一個人の支援者の努力ではどうにもならない教育問題が多く浮上しております。支援計画について「学習支援について」、「キャリア支援について」、「寮生活の支援について」の3項目に分けて、組織的な支援体制を構築して対応することが重要と考え、現状や課題の状況報告を行い、運営諮問会議委員からご意見をいただくことにしました。

会議では、この諮問事項に対して、それぞれの委員の立場から大変有益なご提言をいただきました。今回いただきましたご提言は真摯に受け止めて、今後、本校の教育研究活動における一層の改善に役立てていく所存であります。

最後に、ご多忙中にもかかわらず、本校の発展のためにご助言をいただきました、杉田委員長をはじめ運営諮問委員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年12月

弓削商船高等専門学校長

落 合 敏 邦

## 1 第7回運営諮問会議の提言

前回（平成23年12月19日開催）の会議において、1項目の諮問事項に対して、以下のとおり提言した。

### 1. 国際交流活動について

留学生を確保する方策として、学校の情報を外国に発信し、留学希望者等からの質問等も受け入れられる体制が必要であり、インターネット上での英語版ホームページを整備して、より開かれた学校のイメージを創っていただきたい。また、留学生の受け入れに関しては、国際交流会館を今すぐ設置することは難しいと思われるので、上島町としても非常に協力的であり、まずはホームステイ先を確保して地元との交流を促進し、弓削商船高専として、いかに留学生を多く受け入れ国際交流を活発にしていこうかということの、方向性を示して推進することを提案します。

## 2 提言に対する学校の対応

第7回運営諮問会議の提言に対する学校の対応として、以下のことを確認した。これらのことは今後も継続して努力されることを希望する。

### 1. 国際交流活動について

#### (1) 提言に対する対応

ア 本校のホームページの英語版の整備は、現在のところ未完成であるが、英文が併記されている「学校要覧」をPDF化してホームページにアップした。

現在、ホームページの全面リニューアルを予定しており、リニューアル時に一部英文バージョンを作成する予定である。

イ 学生の海外インターンシップと海外の国際交流協定校からの教員、学生の受け入れを促進するために、国際交流助成の規則を制定した。国際交流を活発化するために、国際交流に参加する学生に対して最大5万円、海外からの受け入れ学生、教員に対しては、一人一泊当たり4千円を助成する規則を制定した。本校の技術振興会からの支援を合わせると、本校学生一人当たり最大10万円を助成することが可能となった。

また、(独)日本学生支援機構の留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）に短期派遣6名、短期受入れ4名としたプログラムを申請している。

ウ 海外インターンシップに参加した専攻科生に対して、単位認定できるように専攻科のカリキュラムに「長期インターンシップ」並びに「短期インターンシップ」を追加した。

新カリキュラムの適用は、平成24年4月に入学する生産システム工学専攻学生からである。

#### (2) 平成23年度国際交流の実施状況

##### ア 海外インターンシップ

(ア) 専攻科2年生1名が高専機構で実施している「海外インターンシッププログラム」に合格し、フィリピンのツネイシホールディングス（株）に3週間インターンシップとして参加した。経費は、高専機構と受け入れ企業が負担することになっている。

(イ) 電子機械工学科4年生3名が台湾の農友種苗(株)に10日間海外インターンシップとして参加し、

農場体験等を行った。経費は、国際交流助成の規則に基づき支援をした。

#### イ 国際交流協定校からの教員、学生の受け入れ

タイ王国ナコンパノム大学から電気工学科の教員2名、学生2名を7月から8月にかけて2週間受け入れ、本校教員、専攻科学生と共同研究プロジェクトを実施した。

プロジェクト名は協定校の大学から提案があったテーマで「メコン川の自動水深計測ロボットの開発」であり、実習船「はまかぜ」に乗船して水深の計測実習を取り入れ意見交換を行うなど、本校の専攻科生、教員と合同で開発に取りかかった。今年度は基本的なシステム設計まで終了し、来年度は本校から学生、教員が大学に訪問し、実際にメコン川で水深ロボットを走らせて共同実証実験を実施する計画である。

#### ウ 宿泊

国際交流協定校からの受け入れは初めての試みであったが、4名の教員と学生を教員の自宅へ5日間ホームステイさせた。それにより問題点等もある程度把握できたので、来年度は上島町にも協力をお願いし、ホームステイを実施していきたいと考えている。

#### エ その他

国際交流を活発化するためには、さらに英語圏の教育機関と国際交流協定を結び、選択肢を広げる必要があるが、現在、国際交流協定を締結しているのは2校である。来年度は、在外研究員で本校の教員1名がハワイ大学マノア校へ行く予定であるので、この機会を利用して大学又はハイスクール校と協定の締結交渉に努力したい。

## 2. 本校の対応への意見

- ・ 学校要覧も日本語と英語で掲載しているのは、グローバル社会の中では外国から見たときに興味を引くものになってきている。海外インターンシップについては、参加した学生が将来どのような職業に従事するかというような追跡調査を行い、インターンシップの趣旨を検証していくことが非常に大事なことではないかと思われ、今後も実施してほしい。
- ・ 国際交流というものはいろいろな観点や方向性から間違っていないし、今後も取り組まなければならない。それには言葉というものが一番大事であり、TOEICなどのプログラムへ積極的に参加させるようなムードを要請していくことが大切である。海外留学生の受け入れをする弓削島は陸から離れているので、町全体で受け入れをするという体制が大切ではないかと思う。限られた施設の中を有効に活用しどのように受け入れていくか、また、学校からやる気のある学生を多く海外インターンシップへ参加させていくムード作りも大切である。地盤を固めてから海外へ行くというステップアップを踏んでいくのがよいと思う。学校単位の姉妹協定や交流協定だけではなく、町を挙げて国際交流を進めていくようなムード作りも大事ではないかと思う。
- ・ 海外向けに職場のホームページを見直しており4ヶ国語のホームページを作成してみた。その際に専門家との情報交換において、日本にはアジア圏の方が興味をもって非常に多く来日しており、中国語、韓国語なども取り入れたらどうかとの提案を受け、その流れの中で実施した経緯もありますので参考にさせていただきたい。

- この1年間で非常に盛りだくさんの国際交流を実施してこることに大変感心している。電子機械工学科4年生が3名台湾に行ったことは、教員の方が努力されて実現されたことでとても頑張っていると感銘を受けた。昨年、国際交流会館の話もあったが、その時にホームステイ先を探したらどうかという話になり、それを実際に教員が受け入れたということで非常に大変だったと思うが、受け入れられてどんな感じであったか聞かせてほしい。

国際交流推進室長から、ホームステイとして自分の家で受け入れた。自分は、2年半ほどタイ王国に行った経験もあるので、言葉にも問題はなく生活できた。また、地域では、花火大会などのいろいろな行事もあったことから楽しんで帰ってもらったと思う。今回のホームステイにおいて問題点等を把握できたので、来年度は他の先生方や上島町の方をお願いして実施していきたい。昨年度の提言でホームステイ先では女子学生の方がやり易いとの話があったので、まずは受け入れやすい女子学生から派遣要請を始めて、軌道に乗れば次に男子学生という形にできたらと考えている。タイ王国は、文化、生活及び宗教がほとんど日本人と同じ考え方であるので、特に問題ないと思われるとの報告があった。

- 受入教員の方の経験を伝えることで他の先生方もホームステイとして受け入れる事が非常にやり易くなるのではないかと思う。
- 現在は商船高専を卒業しても日本人の乗る船は無いのが実情である。商船高専を卒業した人がどういう形でこれから職業に就いていくかを考えた場合、一番適している職業は船舶会社の監督になることが最適なのではないかと力説させてもらっている。そういった観点から海外インターンシップへ行くのもやはり船舶管理会社に行かすという方向で考えるべきではないかと思う。ツネイシホールディングス（株）は立派な造船会社ではあるが、船を作るという造船会社であり、船を作る方と船を運航する方では全然中身が違ってくると思う。商船学科を卒業する以上、船を運航する立場の道に進んでほしい。海外の船舶管理会社は、シンガポールや香港などに多くあるが、そういった会社にインターンシップに行き、船舶運航管理の現場をよく見てくる、また、そこは英語を話すばかりの集団なので、そういった中で船舶運航管理の現状を肌で感じて帰ってくるができるのではないかと思う。連絡をいただければ企業の紹介もできますし、今後、海外インターンシップへ行かせる場合は、そういった方向で考えていってもらいたい。

それと、電子機械工学科の学生は台湾にインターンシップとして農場体験をしたのでしょうか。

国際交流推進室長から、海外の体験という意味での入門としては、安全面も考慮して台湾が良いと考えてのことであった。また、本校教員の知り合いでもあり、初回ということでそうなったとの報告があった。

- 電子機械工学科の学生であるから、農業関係の勉強をしているわけではないと思う。台湾には電子関係の会社も非常に多くあるのだからインターンシップとして活かせるのであれば、自分が習っていることをある程度活かせるような企業を選んで体験してくるというのが学生のためになるのではないかと思う。
- 国際交流について、積極的に取り組みをしていただいて感謝申し上げたい。上島町として何をすべきかと考えた時にまず受け入れをどうすべきかということが行政の仕事であると考えている。意見にもありましたが、町を挙げてどう取り組むかについては担当課と協議していただき、町としても積極的に取り組んでいきたいので、いろいろな案を出してもらいたい。

- ・ 海外インターンシップについては、上島町として支援できる部分は物的なものかと思うので、その辺の協力もさせていただき、人材を育成するという意味で予算も含めて対応させていくのがいいのではないかと思う。
- ・ 上島町には、サイクリストやヨットでの来町者に外国の方も多くおり、町としても受け入れるという体制を整えていく必要があるので、商船高専の学生交流の仲間に入れていただきたい。ホームステイに関しても、そういう人材もおりますので活用していただきたい。
- ・ 国際交流は、学生のために実施することが主たる目的であると思うが、学生募集において、学校の力をつけるにあたって選択肢は1つでも多い方がよい。弓削商船高専に行けばこういう制度があるとかホームステイやインターンシップもあるとか選択肢が多ければ多いほど力がつくと思うので、積極的に進めていただきたい。行政の経験上、どんどん足を運び仲間を作っていくということが結局は生き残る道だと思う。是非、億劫がらずに交流を深めて仲間を作っていき、何かの時には助けしてくれることもあるかもしれないので積極的に進めていっていただきたい。
- ・ 今回、諮問する前から国際交流はターゲットにして研究されていると思う。今の世の中では、企業に入った若者が外国出張を嫌がるといわれており、昔であれば企業を選ぶのにどの企業に入れば外国に行けるとか、外国に行ける可能性のある企業に行きたいというのが現状であった。商船大学では船員になれば外国に行けるという非常に外向きなムードがあった。今の若者は内向きである。だからこそ、学校というのは国際化を学生にPRしていくべきであると思う。語学に関しては英語のカリキュラムを重視されているとは思いますが、中国語などの風潮もあり、英語をベースにして今後は中国語などもカリキュラムを研究していく上で考えていっていただきたい。
- ・ インターンシップの行き先については、やはり商船高専で学んだことについて少しでも専門的なことが身につく、また将来的にもその方面に進むといった意欲を持たず意味で行き先を考えた方がいいとの意見があったが、どこの学校でもインターンシップの行き先は関連のある専門企業に派遣しているし、専門性のある外国人を受け入れているのは当然のことである。今年は、最初の行き先でこれから開拓していこうという状況であれば仕方ない気がするが、今後は徐々に本来のインターンシップとして関連のある専門企業へ進んでいってほしい。
- ・ 国際交流実施状況において、機械工学や情報工学というからみの中で台湾へ農場体験に行ったことに関し、中学校でも職場体験学習があるが、これは一つの暫定的な職業体験として自分の視野を広げるところでの体験学習である。しかし、インターンシップとなると自分の将来に直結するような形での就業体験が本来の趣旨であろうかと思うので、その方向に改めて今後、確認する必要があるのではないかと思う。
- ・ 学寮視察において、以前にテレビ放映で見たことはあるが、実際に学生達が食事をしているところは初めて見させていただいた。住民を代表する自分でさえあまり実態を知らない状況である。インターンシップとは離れるが、一世代前の商船高専のように町民と触れ合う機会をとっていただきたいと思う。そういう意味でホームステイや商船高専の学生をはじめ海外からの学生等を積極的に受け入れる対応をしたいと思っている。町でもキャンプで子供達を預かり民泊をお願いしている実績があり、受入体制はあるので利用していただきたい。

- ・ 校長から、国際交流の対応に対して、各委員からのさらにすばらしい提案があったことにお礼の言葉があった。また、海外インターンシップの行き先に関連して、高専機構が8企業と協定を締結し海外インターンシップを募集している事業で、今回試験に合格し選ばれてツネイシホールディングス（株）に海外インターンシップとして参加したものである。インターンシップに対応するために教育課程の改正も行った。商船学科においては常々実施しているが、単位化はしていないので、そのあたりも含めて今後整備をしていきたいとの報告があった。

なお、商船学科長から、将来的にこのようなインターンシップが学科、学校として広がっていくようであったら、単位化等について検討していきたいとの報告があった。

- ・ 委員長から、提言事項に対して学校の対応状況を報告していただいたが、非常に立派な対応をしていると感心している。本日委員から助言等もありましたので今後の参考にしていただきたい。これからの国際交流につけて、弓削商船高専が他をリードするというような国際交流の相手を増やしていく努力をお願いしたいとの要望があった。

### 3 第8回運営諮問会議諮問事項

第8回運営諮問会議において、諮問された事項は以下のとおりである。

多様化する学生への支援について

#### 1. 学習支援について

##### (1) 現状

ア 近年では、入学生の基礎学力、学習意欲、モチベーションが多様化し、同じクラス内で学習経験の差も顕著になってきており、対応を迫られている。授業では、分割授業や補習授業を実施し、オフィスアワーとして毎日当番制により対応する体制をとっている。また、1年生については、高専の授業に馴染むまで相当期間も要し、支援として学級担任のみでは限度もあり、今年度から初年次教育支援室を設置し組織で支援することとした。初年次教育支援室では、主に1年生を対象に入学前の事前学習、入学直後の英・数・国の学力試験の実施を始めとして、「初年次教育」の授業では合同ホームルームやOBの講演会なども行い、年間を通して学習面の強化も含め総合的な学生支援を予定している。

イ 資格試験や検定試験においては、商船学科は卒業すれば3級海技士国家試験の筆記試験を免除されるが、工業系の学科を卒業しただけでは資格を得ることはできないので、各種資格試験の担当教員を配置して試験の周知、受験する学生への支援を行っている。特に商船学科の海技士国家試験については就職に関係するため重要な資格であるが、過去3年間の試験合格平均実績は、全国商船系5高専中でトップクラスの成果を維持している。

ウ 高専の教科書や教材について、低学年では一般科目系の教科書、高学年では大学の教科書を使用する場合があるが、高専の技術教育に適した教材は今後ますます開発が必要となってきている。高専IT教育コンソーシアムからの支援を受けたe-Learning教材の開発や四国地区高専の化学教員による化学教科書・問題集の出版など高専に適した教材作成を進めている。商船学科においては、商船系5高専連携による「ALL SHOSEN 学び改善プロジェクト」（平成23～24年度事業）により、学習ワークブックなどの適切な学習を促す独創的な教材開発を図る予定である。

エ 各学科において、企業技術者活用プログラムを利用して、関連企業の技術者による講義・演習・実習の技術教育支援を実施している。各学科長から、取り組みについて次のとおり説明があった。

- ① 商船学科では、船舶管理技術者育成プログラムというタイトルをつけ、船舶管理技術に関する知識を身につけさせ、これを活用させて就職を有利にしていこうという試みをしている。1年目は、技術者からの講演、2年目以降は、実践的な技術支援として船長・機関長経験者による弓削丸乗船実習、溶接工経験者による工場実習などで支援をいただいている。英語力向上に関しては英語キャンプを実施しており、企業技術者を活用したこのプログラムは大変好評となっている。
- ② 電子機械工学科では、企業技術者による技術者倫理講演というタイトルをつけている。電気系の理解できる機械職、機械系が理解できる電気職として育成しており、企業からは非常に評判が良く、就職率、進学率も高い状況である。しかしながら、この状況下で問題になっているのが、社会人基礎力の不足している学生が増えていることである。企業に入って、技術職として活躍するために最も必要な力とは何かということに絞ってこのプログラムを組み立てている。講演、授業、グループワーク形式等により、技術者倫理、企業倫理、技術者としての基本的な姿勢などを伝えていく試みにしている。
- ③ 情報工学科では、情報処理システムの開発及び活用事例紹介というタイトルをつけている。コンピュータシステムという見えないものを対象としたものづくりということで、学生には非常にわかりづらくイメージしづらい部分である。就職した後、具体的にどのような職種に就くのか、或いはどのような内容になるのかなど、わかりにくい点をわかりやすく企業経験者の方に説明いただくためにプログラムを活用している。実際にシステム開発を行っている経験者の方を講師として招聘し、開発上で困ったことや成果などを伝えてもらっている。今年度は携帯端末の実践的なプログラム紹介を予定している。

オ 本校の練習船弓削丸を活用して、四国地区高専での連携交流授業も実施している。船舶は一つの完成した工学システムとなっており、非常に良い教材でもあり、今後も継続していく予定である。

## (2) 今後の課題

教員の業務が増加している中で専攻科生によるTAの活用、資格試験や検定試験の受験者増へ向けての啓蒙及び支援体制の強化、さらに適切な教材・補助教材の開発推進、企業技術者活用の充実や共同教育導入の検討など、低学年から高学年まで含めた多面的な学生支援策を講じていくことが課題になっている。

## (3) 諮問事項

多様化する学生への学習支援について、参考となる具体的な対策事例等やご意見などご教示願いたい。

## 2. キャリア支援について

### (1) 現状

ア 本校では、実験・実習を重視した専門教育を行い、大学とほぼ同程度の専門的な知識、技術が身につけられるよう工夫したカリキュラムで教育が行われている。しかし、近年、本校に入学する学

生の学力レベルや入学動機、専門技術に対する興味が多様化している。新入生に対するアンケート調査によると、本校に入学した動機では、就職率がいいという学生が約75%で最も多く、その中で志望する学科に特に興味がある訳ではないが、本校の高い就職率に魅力を感じて入学したという学生が30%もいる実態があります。このような状況から入学から卒業までの間に専門技術への興味と仕事に対する高い職業意識を持たせるためには、きめ細かいキャリア支援が求められている。

イ 本校では、5年生の初めに就職活動に入るわけですが、その前段階として主に4年生を対象に下記に示すキャリア支援を実施している。

① 夏期休業中のインターンシップ参加の奨励

商船学科はインターンシップの単位ではないが、正にインターンシップとなる航海訓練所で1年間の航海実習がある。工業系学科のインターンシップ参加率は、電子機械工学科はほぼ100%、情報工学科は70~75%であり、今後も継続して参加の奨励を行う。

② 本校卒業生のOB・OGによる講演会の開催

3学科合同で本校のOB・OGを「就職講演会」の講師として招き、先輩の視点から後輩に対して仕事や職場の様子、就職活動開始前にやるべき事などアドバイスを聞く機会を講演形式で実施している。

③ 企業の現場技術者による「技術者倫理」の講義

企業の現場技術者を招き、技術者に求められる倫理などをテーマに講演を実施している。

④ 企業技術者活用プログラム

企業の第一線で活躍している技術者を講師として招き、業界の動向、会社が求める人材などをテーマに講演を実施、また、企業退職技術者を指導者として招き、技術指導なども実施している。

ウ このようなキャリア支援は、学生が「就職活動を開始するまでに何を勉強すべきか」を考える機会を与え、勉学に対する意欲を向上させるなどの効果を上げている。

また、商船学科においては、近隣造船所での進水式見学、海技士国家試験の受験支援、地元海事関連企業による講演会やセミナーの開催、「船しごと・海しごと」の冊子を教材として入学時より3年生までの3年間、ホームルームを活用して「船舶職員の仕事や職員になるための道筋」について、実体験をもとに講義を行うなど、学生が将来の目標を見失わないように努めている。

## (2) 今後の課題

高学年では、主に就職や進学に関わるキャリア支援を実施し、高い就職率を維持するなど一定の成果が上がっている。しかし、5年間という期間の中で学校生活に慣れる2・3学年の低学年では、高専特有の「なかだるみ現象」が発生し、目標を失い勉学への意欲が低下する学生がいる。この時期にキャリア支援をすることが重要と考え、今後、全学科で、全学年にわたる継続したキャリア支援をしていくことが課題である。

## (3) 諮問事項

低学年のキャリア支援について、参考となる具体的な事例等やご意見などご教示願いたい。

## 3. 寮生活の支援について

### (1) 現状

ア 本校の学生寮は、寮務主事及び寮務主事補を中心に「団体生活を通して、友愛、協調及び自主の

精神を培い、責任と規律ある習慣を体得させ、将来にわたる人間形成に資する」ことを目的に運営されており、大学の自治寮とは違い教育寮である。

イ 男子1年生及び2年生は原則として全寮制であり、それ以外の学生については許可入寮制となっている。1年生の男子寮生には2人部屋、女子寮生と2年生以上の男子寮生には個室が与えられている。食事は、学校が委託した食堂業者により毎日3食が食堂に準備され、学年により使用時間を分けて利用している。浴室やシャワーは自習時間を除き、毎日午後の5時から11時半まで自由に利用できる。寮棟の各階には補食談話室が設けられており、簡単な調理や寮生間の交流の場として利用されている。また、寮生は、自室の学習机を使い常に勉学に集中できる体制になっている。学生の居室からは、学生自身のパソコンを使ってインターネットへの接続も可能である。

ウ 寮生指導には全教員で当たっており、輪番で宿日直を担当している他、女子棟では週5日は事務補佐員が当直に入る。教員にとってはかなりの負担ではあるが、寮生との密接な支援ができるということもあり、それなりの指導効果が上がっている。

エ 支援組織としては、教員15名及び学生課長からなる寮務委員会が設置され、学寮運営及び寮生に関する事項を審議している。寮内事務室には事務職員2名からなる学生課寮務係が勤務し、学寮の管理運営に関する事務、施設・設備、会計の事務を行っている。

一方、全寮生により寮生会が組織され、寮生会会長・副会長などの役員を中心とし、寮生活が健全にかつ有意義に営まれることを目的として、学寮関係教員と連絡をとりながら行動を行っている。また、本年度より全寮生の保護者を会員とした寮生保護者会を設立し、保護者会総会において保護者からの預り金である学寮生活費の予算決算について承認を得る他、学寮運営に関して保護者の意見を反映できる体制が確立された。

オ 学寮の施設・設備については、現在の寮棟の基本的な改修が完成した平成12年以降も現在に至るまで逐次改善・改修が行われてきた。平成20年度以降だけを見ても、食堂座席数の増設、女子居室へのエアコン設置、シャワー室の増設、2人部屋から3人部屋への改装（1部屋のみ試行）、低学年棟廊下部分への防犯カメラ設置などを行っており、本年度末には男子居室への全室エアコン設置も完了する予定である。

カ 寮生数に関しては、平成12年度以降増加を続け、平成21年度の入学者による寮生数の一時的な減少はあったものの、その後も増加を続け現在に至っている。

## (2) 今後の課題

ア 毎年の寮生数の増加に伴い、学寮の寮生指導及び管理業務の量も増加している一方、寮務関係職員の員数は削減の方向にあり、従来どおりの十分な寮生指導と管理業務を行うには、教職員一人当たりの負担が毎年増加してきている。本年度、高専機構から、教職員の業務軽減化に関して学寮業務の外部委託化が認められるようになり、寮生指導の低下を招かないような体制を検討したい。

イ 施設・設備面を見ると、寮生数が極端に少ない現在の3年生が卒業した後の平成26年度初めには、大幅な居室の不足が発生する可能性が大きい。現在の男子入寮希望者（1年生67名、2年生71名）での数字に鑑み、平成26年度に男子入寮者が各学年70名になるとすると、専攻科生男

子寮生が現在のままの10名としても男子寮生数は356名となり、男子寮定員数315名に比べ41名の不足が生じることとなる。また、この数字には、男子留学生及び男子編入学生の増加分が加味されていないので、これらを加味すると更なる不足が予想され、新棟の建築が喫緊の課題になっている。

### (3) 諮問事項

平成26年度における学寮の男子寮生居室の予想不足分に対して、寮棟の新築をもって対応し、かつ従来どおりの寮生指導と管理業務を行おうとする場合、新棟の施設・設備について具体的にどのようなものが必要と考えられるかご教示願いたい。

## 4 審議内容

### [ 第8回運営諮問会議諮問事項について ]

- ・ 多様化する学生への支援というのは弓削商船高専の問題だけではなく、初等教育等にも及んでいる。能力別にクラス分けをしての授業であったとしても、どの生徒にも同じ着地点を保障しなければならない。この際、授業時数の不足等の問題も出て、補習授業等に伴う先生方の負担が増えるといった覚悟をしなければならぬ。また、その際、本人や親に対しても、なぜこのクラスに在籍しているのかということの説明し、理解してもらっておく必要がある。この問題は、高等教育機関である弓削商船高専でも同様ではないかと思っている。また、学力のとらえ方として押さえておかなければならないことは、知識理解面と併せて、思考力、判断力、表現力、コミュニケーション能力等の両面があるということである。これを二律背反的にとらえるのではなく、共に育てていくということが大切である。そこで、教え込まなければならないことは徹底的に教え込み、しっかりと考えさせなければならないところではじっくりと時間をとって考えさせるなど、それぞれの授業でこの時間はこの学力を育てるという指導者のトリミングが必要となる。これをしないと学生は育たないと思う。
- ・ キャリア教育においては、自分が最終的に目指す進路先にたどり着くにはどのような経路をたどる必要があるかを自覚させることが大切である。そのためにはPDCAのサイクルを一年生の段階から意識させることが重要だと思う。そして、一年毎に見直し軌道修正をしながら積み上げていくということが大事ではないか。そうすれば、中間地点で弛んでいることについても本人が自覚しやすく、指導者が行なう学生個々への指導や指摘もしやすくなる。弓削商船高専としてもキャリア教育の視点から教育活動の全体計画を見直し、職員への周知を図った上で、学生にも折々の自分を自覚させるPDCAサイクルを重視する必要があると思う。
- ・ 寮の中で、縦割りで共有できる談話室のような場所で学生同士が話し合い、自分を見つめたり、先輩の進路について聞いて知ったりすることで自分の方向性や自分を知るといったような創造性を育む寮が完成するように検討願いたい。
- ・ 社会に通用する人間をいかに育てていくかを考えたときに、目標をどこに立てアプローチさせていくかということが大事ではないか。高専を卒業したら就職とすぐに繋がってくるので、社会の仕組みや個人がどのように社会と関わっていくかということを考えさせる教育が最も適切ではないかと思う。自分が社会の一員になる上で、どのようなスキルを身につけて貢献しようか、社会に出ていこうかとわかりやすいシナリオを考えさせるような授業を取り入れるのがよいと思う。社会であ

る程度の地位にある人の話を聞く機会を増やすことも大事であるし、また世間、社会、学校との密接な係わりをどうやって繋げていくかということも大事である。キャリアとしていろいろな資格を取ることも大事だと思うが、いかに生きるかということをお教えることが大事ではないかと思う。

- ・ 寮については、すばらしい寮であると認識しており、新築ができれば定員の問題はないとは思いますが、今後10年20年後には学生数の減少が目に見えているのが現実である。その中で新築がよいかどうか、違う場所をあてがうなどそのような検討も必要ではないかと思う。弓削島の中には空き家もあろうかと思うが、そういった所を改造して学生に開放する、寮母をもうけるなど社会経験もできる場所として、グループホーム的なものもあっていいのではないかと思う。予算的なことも考えるとそういうことも検討していただきたい。
- ・ 最近の学生は、雰囲気が変わり、受け身になっている傾向がある。こちらがメニューを用意すればするほど待っているだけになる。待っているだけで積極的に活用してくれないと作ったメニューが役に立たない。学生が自ら気づき、活用するための方法は、少人数でグループ分けしたような授業で有効になるかもしれない。
- ・ 大きな教室で行うと黙って座っているだけの学生も、10人位で行うと積極的に参加するなど、少人数授業は非常に有効であるという気がする。  
また、オフィスアワーを設定しているが、学生は利用しているかとの質疑があり、教務主事から、親しくなった学生はよく来るが、本当に来て欲しい学生はなかなか来ないとの報告があった。
- ・ 20人程度の授業であれば、相手の顔もわかり、いろいろな対応をすることが可能である。目が泳ぎだす学生など教員の方から見つけることができ、教務係、教務担当、学生担当、クラス担当など共同で学生が落ちこぼれないように対応していくことができる。
- ・ TAについては、先生に相談できなくても、先輩であれば相談がしやすくなるということも考えられる。また、専攻科生にとっても下級生に教えるということは専攻科生自身の教育にもなるので、上手く活用していただきたい。資格試験などでも先輩達のアドバイスを受ける機会や専攻科生の力を活用できるようにしていただきたい。
- ・ 寮については、留学生受入の関係もあり、国際交流センターと併設する格好で新しい施設を建てることはできないのかとの質疑があり、寮務主事から、留学生についても新しい寮で対応したいとの報告があった。
- ・ 高等専門学校は、将来の仕事に就くための勉強をする、技術を習得するための学校であると思っている。その点で、インターンシップでは、将来就きたい仕事の目標を持って行くことにより、肌で感じることができ、実際の現場で勉強をしていくことが大事であると思う。また、インターンシップの行き先として大手の企業に行っているが、近隣の今治地区なども立派な企業があるので活用していただきたい。
- ・ 寮については、将来的な事を考えて選択肢は多くある方がよいので、一方策として下宿などでの対応も考えるべきではないか。

- ・ 学習支援については、好きな先生の授業はいい点が取れたりするもので、学生は常に背中を見ており、先生方も情熱を持って学生に慕われるような姿勢をとり続けることも大切ではないかと思う。
- ・ キャリア支援については、理屈ではなく、意識付けしてやるのが大切である。自分の目標を持っている者は自分の力で目指していくと思うので、後はどうやって気づかせるか、経験者の話を聞く、キャリアを積ます、現場で体験させるなりして、自分の特性を気づかせてやるなど体で感じさせてやるのが大切である。
- ・ 寮については、あくまで寮であるので、規律、マナーも大切であり、何もかも自由にさせることはいけないと思う。建物に関して、生活面の最終的なアメニティーに対してはしっかりとした快適な環境を造っていただきたい。また、気を抜ける場所も必要だと思うので、贅沢にではなくて、そのあたりに予算をかけてほしいと思う。ただ、子供たちは見た目を選ぶこともあり、経営の戦略としては、こんな寮があれば入りたいというところも一つ考えるべきではないか。
- ・ ある会社の社長から、挨拶ができること、休まないこと、この二つができれば後は会社で教えると言われたことがあり、印象に残っている。この二つがきちんとできる学生を育ててほしい。
- ・ 魅力のある先生、教師力のある先生の授業には子どももついていく。子どもの頭の善し悪しは限定できるものではなく、現時点での話であって、将来性という意味では別の多様な見方をしやる必要がある。現時点で自分の特性を本人に気付かせ、いかにやる気を出させるかということが、よりよい生きる力の獲得へとつながることになるのではないか。
- ・ キャリア教育と全体教育等含めてやる場合に、文部科学省から出されている手引きがある。初等教育学校や高等教育機関向けにも出されるということなので、参考にしていきたい。
- ・ 弓削商船高専をもっと露出していただきたい。特異だということをどんどんアピールして情報提供をし、弓削商船高専という学校が上島町にあることをPRしていけばよい。このことにより、地域全体のレベルアップ、また学校のレベルアップにつながる。学校にもいろいろなものが集まってきた国際化にもつながるし、何より学生の励みにもなると思う。
- ・ 教員の宿日直に関して、寮母の入直など賛否両論あってメリット、デメリットいろいろあると思います。学生との係わりも大切ではあるが、先生方が授業に影響しないようにあまり負担にならないように考慮していくべきではないか。そのあたりの配慮も考え、お互いがうまくいく方法を考えていただきたい。

## 5 提言

### 多様化する学生への支援について

多様化する学生への支援は、初等・中等教育段階からの課題となっていることを念頭に置いて、高専においても多面的な支援が必要であると考えられます。学生への支援は、学校が全体計画を立て、中・長期的な視野で取り組んで行くことを提案します。

今回の個々の諮問内容について、以下の通り提言します。

学習支援については、集団での指導だけでなく個別指導も必要であり、教員の資質向上を図るこ

とや学生の実情を把握してTAの活用などを充実させる等の支援により、5年間を通して学生の育成を図ることを提案します。

キャリア支援については、1年生の段階から社会との関わりを意識させ、具体的に目標を持たせることによって、希望する進路へ向けての支援を継続的に行うことが肝要です。関連企業へのインターンシップや現場に携わっている人達と触れ合う機会等の中で自分の特性を発揮し、生き方を見出させる支援に繋げることを提案します。

寮生活の支援については、共同生活の中で寮生同士が交流を深めながら、挨拶を始めとする基本的な生活習慣の涵養を図ることが、実社会へ出た時の評価に繋がります。寮生数の増加への対応は、教員の業務の負荷を考慮しつつ生活面のアメニティーに対してはしっかりと快適な環境を造り、留学生への対応も取り込んで、中学生にとって入りたいと思う寮の新棟建築を目指すことを提案します。



運営諮問会議委員による学寮視察

平成23年12月

運営諮問会議

委員長	国立大学法人神戸大学名誉教授	杉田英昭
委員	上島町長	上村俊之
〃	今治市立大西中学校長	渡邊志朗
〃	弓削商船高専同窓会長	柏木実
〃	(財)えひめ産業振興財団専務理事	村上哲義
〃	愛媛県立医療技術大学教授	岡田眞理子
〃	因島商工会議所会頭	村上祐司



---

独立行政法人国立高等専門学校機構 **弓削商船高等専門学校**

〒794-2593 愛媛県越智郡上島町弓削下弓削1000

TEL (0897) 77-4613 (企画広報室)

ホームページ <http://www.yuge.ac.jp>

---